

## 天龍寺妙智院所蔵『謙齋南遊集』

須岡 田本 牧 子真

## はじめに

本稿は、天文八年度および同十六年度遣明船に関する詩文集『謙齋南遊集』（以下、本書）の翻刻・解説を試みるものである。天龍寺妙智院第三世の策彦周良は、天文年間に二度の入明を遂げたが、その関連史料の多くは、現在、「策彦和尚入明記録並送行書画類」三一種と同一四種という二つのまとまりを中心に、同院に伝存する。本書は、このうち三一種に含まれる。

周知の通り、妙智院所蔵史料の大部分に関しては、すでに牧田諦亮氏によって翻刻が公表されて<sup>(1)</sup>おり、本書もその例外ではない。ただし、同院所蔵史料の大部分は、彼の生前からすでに妙智院に存したものであるのに対し、本書は後人の手による写本である。原本が所在不明な史料の場合、現存する写本の比較校合により、可能な限り原本の姿へとさかのぼるべきことは言うまでもない。そのため後掲の翻刻では同本を底本としつつ、他の写本との異同を注記することとした。既存のものがあってもかかわらず、本稿においてふたたび翻刻する理由は、この点にある。

以下では、本書の翻刻に先立って、諸本や関連他書、成立と伝来、内容について、解説と考察をおこなうこととする。

## 一 諸本

管見に入った写本は、天龍寺妙智院所蔵『謙齋南遊集』、宮内庁書陵部所蔵『謙齋南遊集』、京都大学人文科学研究所所蔵『謙齋南遊集』、宮内庁書陵部所蔵『策彦南遊集』、国立国会図書館所蔵『策彦和尚南遊集』、静嘉堂文庫所蔵『策彦南遊集』の六点で、いずれも一冊本である。<sup>(2)</sup>以下に各写本の概要を紹介する。

## ①天龍寺妙智院所蔵『謙齋南遊集』（妙本）

前述の通り、今日では他の策彦周良生前からの史料とあわせて妙智院に所蔵されているが、後世の写本である。いつ頃から同院にあったかは定かでないものの、享保十三年（一七二八）ないしその翌年に作成されたと考えられる『天龍寺本寺並塔頭諸末寺所蔵稀書目録』の妙智院蔵書の項に「一、南渡詩集策彦良著 写本 一冊」とあるのが、これにあたりと推測される。<sup>(3)</sup>表紙には「謙齋南遊集」との墨書があり、「妙智禅院」印を捺した紙が貼付されている。第二丁表には内題「謙齋南遊集」があり、「妙智禅院」印も捺されているが、表紙に貼られたものとは異印である。本文は、最後の一首（III）<sup>(4)</sup>の最終行が記されている裏見返を除く

と、墨付二三丁で、每半葉一〇行前後、一行一八字前後である。

本文に関する、他本には見られない妙本の特徴として、以下の三点が挙げられる。一点目は、牧田諦亮氏の指摘する通り、第一丁が異筆で、いったん本書が成立した後に、追補されたと思われる点である。それは、前述の通り内題や蔵書印が第二丁表に存することや、裏見返左下隅に「除空楮廿二帳」という墨書があり、これが記された時点では、墨付が現在よりも一丁分少なかったと見られることから裏付けられる。さらに、第一丁に記された五首（1〜5）が、後述のように同一系統の他の写本に収録されていない点も、これが追補である証左となる。

二点目は、最後の一首（III）が他のいずれの写本にも見られない点である。前述のように最終行が裏見返にわたっていることを踏まえると、この詩もまた、後から追加された可能性がある。ただし、それ以前の本文と同筆なので、第一丁の追補以前のものであろう。あるいは、妙本の底本の段階で、すでに存していた可能性もある。

三点目は、後述のように本書の写本には二系統が存し、系統間で一部の漢詩の字句が異なっているが、妙本では、一方を写したものに、もう一方との対校の結果が、傍注として記されている点である。後掲の翻刻を見れば明らかのように、こうした傍注は、字句が系統間で異なる箇所について、ほぼ網羅的に施されている。また、一部に朱筆のものも存することから、少なくとも二度にわたって対校がなされた可能性がある。

## ②宮内庁書陵部所蔵『謙斎南渡集』（書A本）

函架番号は二〇五・二六四で、後補された現在の表紙に「謙斎南渡集」と記された題簽が付されている。それを開くと以前には表紙だったと考えられるものに「謙斎南渡集 全」との墨書があり、さらにその内側には原表紙と思しいものに「謙斎南渡集 全」との墨書があつて、第

一丁表に内題「謙斎南渡集」がある。押印は、同丁表に「天爵堂圖書記」、第一八丁表に「君美」があり、新井白石の旧蔵書と知られる。また、第一丁表には「宮内省圖書印」の押印もある。本文は墨付一八丁で、每半葉一二行前後、一行二一字前後で、若干の虫損がある。

本文に関しては、前述の通り、妙本で追補されている1〜5は収録されていない。内題の後に6から書き始められて62まで至り、63はないが、64から110は存し、111は収録されていない。63は伝写の過程で抜け落ちたものであろう。また、収録されているものの中では、83と84の順序が前後しているが、これも伝写の過程で生じた変化と目される。

この書A本には朱字による補筆があり、その最初にあたる69aの末尾に「明治壬午、於宮内六角堂説之、以朱字補之、宮島栗香」との割書がある。宮内六角堂は不詳だが、宮島誠一郎（栗香）は明治十五年当時、修史館御用掛兼宮内省御用掛であり、当時宮内省にあった書A本を閲読し得る立場にあった。彼が典拠としたものは不明だが、補筆の内容からして、本稿で言及する諸写本のいずれとも異なるものであったと考えられる。

なお、この書A本が新井白石の所蔵に帰した時期は、彼が没した享保十年（一七二五）以前であることは確実である。中御門天皇即位式拝觀のため宝永七年（一七一〇）末、翌年はじめに彼が上洛した際、五山寺院に所蔵されていた書籍を熱心に収集した事実からすると、あるいはこの頃に入手したものかもしれない。

## ③京都大学人文科学研究所所蔵『謙斎南渡集』（京本）

請求記号は二八九・一／S一八七で、表紙題簽に「策彦南渡集」とあり、その内側の原表紙に「謙斎南渡集 全」とあつて、さらに第一丁表の内題には「謙斎南渡集」とある。原表紙に「画禅盦」の印が捺されて

おり、富岡鉄斎旧蔵本であることがわかる。本文は墨付一八丁で、每半葉一二行前後、一行二一字前後である。

この京本の本文は、前述の書A本とまったく同じ排列である。ただし、朱字による補筆は加えられていない。

#### ④宮内庁書陵部所蔵『策彦南渡集』（書B本）

函架番号は二〇五・二六七で、表紙題簽に「南渡集策彦」とあり、第一丁表の内題に「策彦禪師南渡集」とある。同丁表に「天爵堂図書記」、第二三丁裏に「君美」の印が捺されていることから、書A本と同様に、新井白石の旧蔵書であると知られる。また、第一丁表には「宮内省図書印」「明治十八年改」「図書寮印」の押印もある。本文は墨付二三丁で、每半葉一〇行前後、一行一八字前後で、若干の虫損がある。

本文は、書A本同様に6から書き始められているが、それ以後10に至るまでは妙本と同じ排列である。そして、11が収録されていない代わりに、妙本では冒頭の追補のなかに存する2が10の直後に位置している。

書B本において特筆すべきは、末尾に「天龍仲長老寄贈<sup>前後</sup>二本」と記された、本文とは異筆の付箋が存することで、虫食い跡の一致からして、ある程度早い段階から同本に付されていたと考えられる。この付箋の記載にしたがうと、同本は「天龍仲長老」なる人物より寄贈された本ということになる。ただし、天龍寺の歴代住持のなかに、該当する人物は見いだせない<sup>(7)</sup>。推測するに、これは本来「天龍中長老」を指すのではないだろうか。仮にそうであるならば、天龍寺二〇九世かつ妙智院七世で策彦の法系に連なる、中山玄中に比定できる<sup>(8)</sup>。また、「前後二本」は、前述の書A本とこの書B本を指す可能性もあるが、確証はない。

#### ⑤国立国会図書館所蔵『策彦和尚南遊集』（国本）

請求記号は詩文―二八七二で、表紙題簽に「南渡集」、第一丁表の内題に「策彦禪師南渡集」とある。押印は、表紙見返に「国立国会図書館蔵書」があるのみだが、鶚軒文庫のうちの一冊で、土肥慶蔵の旧蔵であることが知られる。本文は墨付二三丁で、每半葉一〇行前後、一行一八字前後である。

国本の本文は、前述の書B本と同様の排列である。ただし、書B本では付箋に記載されていた「天龍仲長老寄贈<sup>前後</sup>二本」という文言が、国本では最終丁に直接記されている。そして、書体こそ本文と違って、書B本の付箋に似せて書かれているものの、墨の濃淡などから判断する限り、本文と同筆で写されたものと判断される。

#### ⑥静嘉堂文庫所蔵『策彦南渡集』（静本）

函架番号は五四・二五で、表紙題簽に「策彦南渡集 完」、第一丁表の内題に「策彦禪師南渡集」とあって、同丁表に「静嘉堂蔵書」印が捺されている。表紙の透かし文様に「静嘉堂」の字が含まれていることや、料紙の状態からして、近代の写本と判断される<sup>(9)</sup>。本文は墨付二二丁で、每半葉一〇行前後、一行二〇字前後である。

静本の本文も、前述の書B本や国本と同様の排列である。そして「天龍仲長老寄贈<sup>前後</sup>二本」という文言は、やはり最終丁に直接記されている。ただし、その書体は本文と同様である。

右に挙げた六本の写本は、おおよそ二系統に分けることができる。すなわち、妙本・書A本・京本と、書B本・国本・静本である。以下、それぞれを仮に第一系統、第二系統と呼称する。

まず、系統ごとに共通する特徴を見てみたい。代表的なものとしては、以下の二点が挙げられる。一点目は、内題およびその下部の記述で

ある。すなわち、前述のように諸写本は例外なく内題をともなっているが、第一系統に属する写本にはいずれも「謙齋南渡集」とある。それに対し、第二系統のものには「策彦禪師南渡集」とある。<sup>10)</sup>また、内題の下部には二度にわたり明へ渡航した際の策彦周良の年齢が記されているが、第一系統には「渡唐行年四十一、再渡五十二歳」とある。一方、第二系統には割書で「初渡三十九歳、再渡四十七歳」とある。策彦は文龜元年（一五〇一）生まれであるため、この年齢が入明時の年齢を指すのであれば、第二系統の記載が正確である。

二点目は、漢詩の字句の差異である。たとえば16の三句目について、第一系統では「金風体露生鉄面」となっており、第二系統では「吾翁宣偈頌香后」となっている。詳細は後述するが、こうしたものは、一方から他方へと改作したものと考えられる。なおこの部分は、妙本では「吾翁宣偈頌香后金風体露生鉄面」となっており、前述のように第一系統の字句を記したうえで、第二系統のそれを傍書している。

次に、系統内の各写本の関係について見ると、第一系統の三点のうち、書A本と京本とは、丁数や字配り、本文の排列の一致などから、近い関係にあると考えられる。ただし、細かな字句の異同については、それぞれ固有のものも少なからず存するため、一方が他方を写したものであると判断される。これに比し妙本は、書A本および京本とはやや差異が大きい。牧田諦亮氏は、京本について「もとより妙智院蔵の『謙齋南渡集』にもとずくものである」と述べているが、<sup>11)</sup>丁数と字配りのちがいや、妙本に見られる第二系統との対校注と追補が京本にはないことなどからすると、直接の親子関係にあると見ることはできない。

一方、第二系統については、書B本では付箋に異筆で書かれている文言が、国本では書体を違えてはいるものの同筆で最終丁に直接記されており、静本では同筆かつ本文と同じ書体で、やはり最終丁に直接記され

ている。また、国本や静本では、それらの祖本に生じていたと思しき虫損のような跡が墨線で書かれているが、それに該当する書B本の部分には、実際に虫損がある。これらの点から、書B本が国本や静本の祖本にあたることは明白である。

このうち国本については、書B本を直接写したのかどうかを判断する材料に欠けるが、静本については、同じ静嘉堂文庫所蔵の『策彦入唐雜録』（函架番号八七・六三）の存在が参考になる。同書と静本は表紙も装丁も同じで、筆致も同一人によるものと見うけられるが、これと同名かつ同内容のものが、宮内庁書陵部にも所蔵されている（函架番号二〇五・三一五）。よって、静嘉堂文庫所蔵の両書は、近代以降の同時期に宮内庁書陵部所蔵本を底本として写されたものと見てよいであろう。したがって、静本は書B本と直接の親子関係にあると考えられる。

## 二 関連他書

諸写本に関しては前節に述べた通りだが、本書に収録された漢詩のなかには、他書の収録内容と重なるものもあり、それらは本書の成立について検討するうえで重要な材料となる。そこで本節では、管見に入った限りではあるが、関連他書について言及したい。

### ①『初渡集』

天龍寺妙智院所蔵の、天文八年度船渡航時の策彦周良自筆の旅日記で、明側とのあいだでやりとりされた通達文書や提出文書なども写し留められた、詳細なものであることが知られている。本書に収められた一一題一二六首の漢詩のうち、『初渡集』と共通のものは三四題三五首あるが（次頁表参照）、共通の有無に明確な法則性は見いだされない。共通するものうち二題（32・40）については、本書には二首見えるの

に対し、『初渡集』には一首しか見られない。そして、25については、本書では桃果を手土産に来訪した趙一夔からの求めに応じて作詩したのが序に記されているが、『初渡集』嘉靖十八年閏七月六日条には、趙一夔が人を遣わして桃果を贈ってきたことが記されるのみで、詩の記載はない。この詩自体は、正使湖心碩鼎の催した詩会で作製したものとして、同七日条に記載されており、両史料で食い違いが生じている。

また、41・75・104～107・110は、詩題・詩序にしたがうと策彦が再渡の際、すなわち天文十六年度船渡航時に作製したものということになる。

これに加えて、寧波の文人豊坊と面会して応酬した36・37も、再渡の際のものと考えられる。<sup>(13)</sup>しかし、これらのいずれも再渡時の旅日記『再渡集』には収録されていない。なお、75は詩題に「再渡之時、復上金山寺」とあるが、『初渡集』嘉靖十九年八月五日条に同じ詩が収録されており、初渡の帰路の際のものであることが明らかである。同書や後述の『謙斎雜稿』の詩題に「再登金山」とあることからすると、初渡時の寧波から北京への往路に初めて金山に立ち寄ったあと、復路に再び赴いた際に作製したものであったのが、本書の編集にあたって二度目の渡航時のもとの誤解され、「再渡之時」と記されるに至ったと考えられる。

一方、『初渡集』には、本書に収録されているもの以外にも大量の漢詩が記載されており、なかには『初渡集』嘉靖十八年閏七月十日条のように、同日条に複数の漢詩が記載されているのに対し、本書にはそのうちの一首(27)しか収録されていないことさえもある。また、『再渡集』は『初渡集』に比して日々の記載量が少なく、折々に作製した漢詩に限れば三首を見いだせるのみであるが、いずれも本書には収録されていない。策彦が明滞在中に詠んだ漢詩という点では、これらは本書に収められていても不思議ではない。このことからすると、本書が編まれた際には、策彦の明滞在中の漢詩すべてを網羅的に収録したわけではなかった

ことがうかがえる。

なお、牧田諦亮氏は、本書について「兩度の入明時、経過した寺廟、景勝の地を詠んだものを入明記等から後人がおほむね北上の順に無雑作に集録したものである」と述べている。<sup>(13)</sup>しかし、詳細は後述するが、本書と『初渡集』とで共通する漢詩には、文言の相違するものがあり、少なくとも『初渡集』や『再渡集』を直接の典拠としたものでないことは明らかである。

#### ㊦「晩過西湖」

天龍寺妙智院や早稲田大学図書館などに軸装されて所蔵されている。策彦は明より帰国した後、しばしば40を書いて人に与えていたようである。妙智院所蔵のものは、規宗知蔵のために書いたものであることが、為書から知られる。<sup>(14)</sup>二首あるうちのひとつの三句目に「參得雨奇晴好句」とあるのは、蘇軾の詩を踏まえたものである。<sup>(15)</sup>

#### ㊧『謙斎雜稿』

天龍寺妙智院所蔵で、牧田諦亮氏が指摘しているように、前半は策彦自筆の詩文や記録の草稿で、後半は後人の手による追補である。<sup>(16)</sup>本書収録内容と重複するのは75のみで、同書の後半に収められており、前述の通り「再登金山」との題が付されていて、さらにその下部に小字で「南渡ノ内」と記されている。この「南渡」は本書を指すと考えられる。

なお、策彦周良の作品を集めたものには、この『謙斎雜稿』以外にも、『謙斎詩集』(『策彦和尚詩集』とも)があるが、本書所載の漢詩は収録されていない。これらに収められた作品群とは別に、入明にかかわる漢詩群がまとめられていたものと考えられる。

【対照表】

謙齋南遊集No.	初渡集年月日	南遊薬No.	翰林五鳳集頁
1	嘉靖 18.8.29	⑰	—
2	嘉靖 19.8.25	—	—
3	—	—	—
4	—	—	—
5	—	—	—
6	—	—	—
7	—	—	1249
8	天文 8.5.11	—	520
9	—	—	1249
10a	—	—	1023
10b	—	—	1023
11	嘉靖 18.7.2	①	516
12	嘉靖 18.7.19 ●	② ●	542 ▲
13	嘉靖 18.7.19 ●	③ ●	321 ▲
14	嘉靖 18.7.21	④	863
15a	嘉靖 18.7.21	—	602
15b	嘉靖 18.7.21	—	602
16	嘉靖 18.7.27 ●	⑤ ●	727 ▲
17	嘉靖 18.7.28	—	527
18	嘉靖 18.7.28	⑥ ●	625
19	嘉靖 18.7.29 ●	—	477 ▲
20	嘉靖 18.閏 7.1 ●	—	464 ▲
21	—	—	594
22	—	—	450
23	—	—	834
24	嘉靖 18.閏 7.5 ●	⑧ ●	447 ▲
25	嘉靖 18.閏 7.7 ●	⑩ ●	313 ▲
26	嘉靖 18.閏 7.5 ●	⑨ ●	469 ▲
27	嘉靖 18.閏 7.10	⑪	504
28	嘉靖 18.閏 7.15 ●	⑫ ●	1249 ▲
29	嘉靖 18.閏 7.19	⑬	1060
30	嘉靖 18.8.11	⑮	1250
31	嘉靖 18.8.18 ●	—	1122 ▲
32a	嘉靖 18.8.24	⑯	1250
32b	—	—	1250
33	嘉靖 18.8.19 ●	—	603 ▲
34	嘉靖 18.8.19 ●	⑭b ●	331 ▲
35	嘉靖 18.8.20	—	536
36	—	—	542
37	—	—	542
38	—	—	767
39	—	—	1133
40a	—	⑳a	766
40b	嘉靖 18.11.8	⑳b	766
41	—	—	—
42a	—	—	763
42b	—	—	763
43	—	—	770
44	—	—	—
45a	—	㉑a	1186
45b	—	㉑b	1186
46a	—	—	828
46b	—	—	828
47	—	—	1023
48	—	—	1023
49	—	—	771
50	—	—	1022
51	—	—	1022
52	—	—	1022
53	—	—	761
54	—	—	1022
55	—	—	751
56a	—	—	—
56b	—	—	771
57	嘉靖 18.11.9	㉒	764
58	嘉靖 18.11.16	㉓	1023
59	—	—	1021
60	—	—	762
61	—	—	762
62	—	—	1022
63	—	—	749
64	—	—	749
65	—	—	761

謙齋南遊集No.	初渡集年月日	南遊薬No.	翰林五鳳集頁
66	—	㉔	—
67a	—	㉔a	1182
67b	—	㉔b	1182
68	—	—	1182
69a	—	㉔a	1142
69b	—	㉔b	1142
70	—	㉕	1022
71	—	—	782
72	—	—	761
73	—	㉖	803
74	—	—	781
75	嘉靖 19.8.5	—	1021
76	—	—	1022
77	—	㉗	766
78	—	㉘	—
79	—	—	782
80	—	—	1022
81	嘉靖 18.12.13	㉙	1130
82	—	㉚	—
83	—	㉛	1143
84	—	㉜	1143
85	—	—	1138
86	嘉靖 18.12.30	㉝	424
87	嘉靖 18.12.30	㉞	424
88	嘉靖 18.12.30	㉟	—
89	嘉靖 19.1.4	㊱	764
90	—	—	781
91	—	—	—
92	—	—	762
93	—	—	1131
94	—	—	1173
95	—	—	1132
96	—	—	839
97	—	—	770
98	—	—	771
99	—	—	771
100	—	—	751
101	—	—	505
102	—	—	505
103	—	—	195
104	—	—	603
105	—	—	603
106a	—	—	751
106b	—	—	751
106c	—	—	751
106d	—	—	751
106e	—	—	751
106f	—	—	751
107	—	—	751
108	—	—	766
109	—	—	782
110	—	—	—
111	—	—	764
—	嘉靖 18.閏 7.2	⑦	—
—	嘉靖 18.12 末雜載	⑭a	—
—	嘉靖 18.9.8	⑱	—
—	嘉靖 18.10.9	⑲	—
—	嘉靖 18.10.25	⑳	—
—	嘉靖 18.11.8	㉑	—
—	嘉靖 19.1.9	㉒	—
—	—	㉓	—
—	嘉靖 19.1.14	㉔	—
—	嘉靖 19.1.14	㉕	—
—	嘉靖 19.1.22	㉖a	—
—	嘉靖 19.1.22	㉖b	—
—	—	㉗	—
—	嘉靖 19.4.1	㉘	—
—	嘉靖 19.4.4	㉙	—
—	—	㉚	—
—	—	㉛	—

▲ = 第1系統の字句  
 ● = 第2系統の字句  
 翰林五鳳集の頁数は注(17)書によった。

㊦『翰林五鳳集』

元和九年（一六二三）の序跋を有する、以心崇伝らが撰した詩偈集である。<sup>(17)</sup>鎌倉期からその時点までの、多数の五山僧の作品が収められているうえに、春部、試筆部、夏部というように類別されているため、本書所載の漢詩と重複するものを採り出すのは容易ではない。だが、少なくとも本書の大部分は収録されていることが確認された（表参照）。このうち、前節において言及した、系統ごとに字句の異なる漢詩については、例外なく第一系統の字句のものが採録されている。よって、『翰林五鳳集』修撰にあたっては、この系統の本を参照したと推察される。ただし、書A本や京本では脱落している63は収録されており、妙本で追補されている1〜5は採られていない。そのため、前掲の本書写本とはまた別の、第一系統の本か、あるいは追補される以前の妙本に拠ったものと考えられる。

㊧『南遊藁』

宮川一翠子が編纂した『拾遺意行』に収録される。<sup>(18)</sup>同書は元禄六年（一六九三）の序跋を有する、京都の書肆永原屋孫兵衛（中村孫兵衛、昌陽軒）によって版行された二巻本で、同じく一翠子の編纂した『詞林意行集』（同三年出版）の続編にあたる。『拾遺意行』には四点の紀行集が収められていて、そのうちのひとつが「南遊藁」である。底本は定かでないが、作者については「策彦和尚」「天龍寺策彦」と記されており、策彦周良の作品集であることがわかる。

内容は、本書と同様、策彦の明滞在中の漢詩を収めたものであるが、同一書とは見なしがたい。というのも、収録されている漢詩が本書とは少なからず異なっているからである（表参照）。また、『初渡集』同様、共通して収録されている詩とそうでない詩とのあいだに、明確な差異は

認められない。なお、「南遊藁」に記された詩題は本書や『初渡集』と比較して簡略なものが多く、版行にあたって編集された可能性がある。

一方、「南遊藁」には本書未収録のものが一七首収められているが、そのうち一三首は『初渡集』に収録されている（表参照）。残りの四首のうち末尾の二首は、策彦の作製した詩ではなく、妙心寺僧大休宗休が策彦の入明を餞行したもので、彼の詩文を集めた『見桃録』にも収録されている。したがって、「南遊藁」に収録されており、かつ他書には見えない、策彦が入明中に詠んだ漢詩は二首のみである。ただし、『拾遺意行』自体、今日に伝わっているのは数本に過ぎず、近代以降に翻刻されたことはないし、本書になく『初渡集』に収録されているものでも、字句が異なる場合がある。そのため、本稿の末尾には、本書との重複を省略する形で、「南遊藁」の翻刻も掲載することとした。

㊨『隣交徴書』

伊藤松が編纂した、外国との交流にかかわる詩文等の集成書で、天保九年（一八三八）から同十一年にかけて、一〜三篇、各篇二巻の合計六巻が版行された。このうち二篇巻二に101・104・107が、三篇巻二に20・21・36・37が収録されていることは、つとに牧田謙亮氏が指摘している通りである。<sup>(19)</sup>このうち20の字句から判断する限り、本書の第一系統の写本から引用したものと考えられる。同書には他の妙智院所蔵史料が、典拠を明記する形で収録されているので、妙本に拠ったものである。

三 成立と伝来

右の関連他書のうち、特に『初渡集』および「南遊藁」は、前述のように二系統ある本書の成立を考えるうえで重要である。そこで、以下では、それらとの比較を通じて、本書の成立と伝来について考察したい。

まず、『初渡集』に収録されていない漢詩が複数、本書と「南遊藁」に収録されていることからすると、在明中に旅日記として書き留められた『初渡集』とは別の形の漢詩の手控えが、現存してはいないもの、かつて策彦の手元にあったと想定される。遣明使節の行程中に作製された詩が悉皆的に集積されたかどうかは不明だが、基本的に新たに詩作がなされる都度、そこに加えられていったものと考えられる。この手控えをもととして、そこから意図して抜粋したか、あるいは意図せず脱落したかは不明だが、ある程度の編集を経て、本書ならびに「南遊藁」の原形がそれぞれ成立したものであろう。

次に、本書と『初渡集』とで共通する漢詩のなかには、単なる誤記とは見なしがたい字句の相違の存するものがある。たとえば13の四句目は、本書には「我有旧声唯暗蛩」とあるが、『初渡集』嘉靖十八年七月十九日条には「聞似旧声唯暗蛩」とある。また、14の三句目は、本書には「預恐帰期惱離思」とあるが、『初渡集』同二十一日条には「預恐明年忘帰興」とある。ほかに15b・19・25・32a・33・75などにも存するこのような相違は改作の跡と考えられ、一方がより原態に近く、もう一方がそれを改めたものと判断される。

これについて考察する手がかりとなるのが、本書と『初渡集』に共通する詩のなかに、同書内での見せ消ちによる改訂の結果、同一の字句になっっているものが存する点である。たとえば40bの二句目は、本書では「暗度西湖々水涯」となっているが、『初渡集』嘉靖十八年十一月八日条では「抹過<sup>暗度</sup>西湖々水涯」とあって、いったん「抹過」としてから、策彦自身の筆跡で「暗度」と書き改められている。こうした状況や、『初渡集』が帰国後にまとめられたような類ではなく、渡航中に書き継がれていったものであることを踏まえると、<sup>20</sup>同書所収のものの方がより原態に近いと考えられる。

なお、本書と『初渡集』とで共通し、かつ字句の相違の存するものうち、13・14・25・32aなどは「南遊藁」にも収録されていて、いずれも『初渡集』のものと同様の字句になっている。このことからすると、本書と「南遊藁」とでは、後者の方がより原態に近いと判断される。おそらく、『初渡集』だけでなく手控えの方も折に触れて改作されており、比較的早い段階のものに拠ったのが「南遊藁」なのであろう。

また、本書と『初渡集』とで共通する漢詩のなかには、本書の写本系統間で、字句の異なるものもある（表参照）。そうした詩については、『初渡集』には例外なく第二系統の字句が記されている。さらに、本書と「南遊藁」とで共通する詩（同前）についても、同書ではいずれも第二系統の字句が記されている。これらの特徴からすると、本書のふたつの写本系統のうち、第二系統の方がより古態に近いと言える。

これと関連して注目されるのは、88の三句目の第一字である。この字は「南遊藁」では「監」となっているのだが、本書の写本のうち、妙本では「畎」と字の上部だけが写されている。また、書A本ではもともと空白になっていた所に宮島誠一郎が朱筆で「祠」と書いており、京本ではこの部分に一字分の空白があり、書B本・国本・静本では「賢」となっている。つまり、本書の写本いずれもが、「監」字を適切に写せてはいないのである。これが虫損などによるものか、伝写の過程で生じた誤りなのか定かでないが、本書の第一系統と第二系統の共通の祖本において、「監」字が判読できない状態になっていたことをうかがわせる。

なお、この88の三句目の冒頭二字は、『初渡集』では「阿咸」と書かれたあとに見せ消ちで「監司」と改められ、その後さらに「廟前」と改められている。これらの改作はいずれも策彦の自筆のように見うけられる。見いだし得たのはこの一例のみだが、『初渡集』には、本書や「南遊藁」に反映されていない修正も存する点には留意する必要がある。



以上の検討結果と、諸本や関連他書の項において指摘した事柄をもとに、本書および「南遊藁」の成立と伝来について整理すると、以下のようになる。策彦が在明中に詠んだ漢詩は『初渡集』と手控えとに記録され、保存されていた。それらには後に策彦自身の手が入られ、改作されていた。そうした改作のうち、初期のものがなされた時点での手控えの面影をのこしていると考えられるのが、「南遊藁」である。ただし、本書と「南遊藁」の収録内容には重複しないものも多いことから、『拾遺意行』編纂の際か、その底本の段階かに、ある程度の抜粋ないし脱落があったものと考えられる。

こうして「南遊藁」へと分岐した後にも、手控えの詩は引き続き改作されていった。その結果を踏まえて成立したのが、本書第二系統の祖本である。これについても「南遊藁」同様、もともたなかった手控えからある程度の抜粋ないし脱落があったものと考えられる。また、この段階の改作や編集が策彦自身によるものか、それとも後人によるものかは不明だが、前述した75の詩題の誤りなどからすると、自身によるものだったとしても、記憶がおぼつかなくなった、晩年のことであろう。さらに31の詩序に「余・副使」という記述が見られるが、表からも明らかなどおり、これは初渡時の詩であり、このとき策彦は副使であるから「正使・余」とするのが妥当である。こうした誤りからすると後人の編集も入っていることが想定される。この祖本を直接あるいは間接に写したのが書B本で、それを伝写したのが国本と静本ということになる。

一方、本書第二系統の祖本に近い段階のものに、さらに改作の手が加わって成立したのが、本書第一系統の祖本である。前述のように、元和九年（一六二三）の序跋を有する『翰林五鳳集』は、本書第一系統のものに拠ったと考えられるので、遅くとも同年より前に成立していたと見て間違いない。そこからさらに伝写を経たものが妙本・書A本・京本

で、うち後二者は、妙本とは異なる共通の本に拠った可能性が高い。その後、妙本には本書第二系統の写本との対校による傍書や、同本第一丁の1〜5の増補がほどこされ、現在に至ったと考えられる。江戸期の妙智院が、策彦関連史料を丁寧に取り集検討していたことがうかがえる。

#### 四 内容

最後に、本書の内容について関説したい。本書は日本を出発後、寧波を経て北京へのほり朝貢儀礼を果たし、ふたたび寧波に戻って帰国するという、いわゆる「南渡」の旅路に沿って詩を並べるといふ方針のもと、編集されたものと考えられる。前述の通り妙本冒頭の1〜5は追補と考えられるので、それらを除くと、博多湾に浮かぶ志賀島で詠んだものから始まり、航海中の所懐を詠んだもの、中国沿海への到着時のもの、寧波滞在中のもの、北京上京の旅路で作製されたもの、北京滞在中のもの、寧波で帰国を待っている際のもの、帰国の航海途上でのものというような順で記されていることが見て取れる。つまり初渡時と再渡時、またそれぞれの往路と帰路とを問わず、時系列には拘泥せずに、旅の行程に沿って並べざることを旨として、編集されたものと推測される。

ただし、策彦の記した初渡時の旅日記『初渡集』に、詩だけでなく関連する記述さえも見いだし得ないものについては、彼が実体験をもとに作製したとも限らない点に、留意する必要がある。例えば38の詩序には、八月十七日に浙江駅に宿泊し、翌日に銭塘江で、蘇軾の詩に詠まれた大海嘯の光景を問近に観て詠んだものである旨が記されている。ところが、『初渡集』『再渡集』の記述と対照すると、これが虚構であることは明らかで、彼は蘇軾の詩を踏まえた詩作を欲したがために、これを実見したことにして、詩を作ったものと考えられる。<sup>22)</sup>

それ以外にも、108・109で詠まれている曲江や雁塔は、長安にあった池

と、同所の大慈恩寺内にある仏塔である。周知の通り、唐都長安は浙江・江蘇・山東・河北と北上を続ける遣明使節の旅路から、遙か西に隔たった所に位置し、策彦が赴くことは不可能であった。ただし、大慈恩寺という名の寺院は明都北京にもあったので、あるいはそれに仮託した作詩なのかもしれない。その点では、杭州府所在の長安駅を詩題とする55が、唐都長安のことを読み込んでいるのも、同様の可能性がある。

本書に収録された漢詩のなかでもひととき目立つのが、北京において皇帝や高官と応酬したとする詩である。ただし、106は四月二十三日の出来事と記されているが、前述の『初渡集』『再渡集』や、使節行の概要を記した『入明略記』などには、それに対応する記事はない。また、漢詩六首の末尾に付された人名のうち、策彦本人を除く朱祐以下五名全員ついて、中国側の史料に該当する人物を見いだすことができない。さらに、皇帝との詩の唱和にかかわる100・102・104・105・107についても、『初渡集』以下の史料に関連する記載はない。これについては、洪武帝との詩の唱和がのこる、絶海中津らの故事にならった創造なのかもしれない。<sup>23)</sup>

本書が、策彦周良の二度にわたる入明にかかわるものであることは紛れもない事実である。ただし、収録されている漢詩や、それに付された詩序などには、現実の出来事とは異なる要素が入り込んでいるものもある。歴史史料としてあつかう上では、その点を意識する必要がある。

#### 注

- (1) 牧田諦亮『策彦入明記の研究』上(法蔵館、一九五五年、のち同『牧田諦亮著作集』五、臨川書店、二〇一六年に再録)。
- (2) 書名は各所蔵者の登録名称にしたがった。このほか、『国書総目録』三(岩波書店、一九九〇年)によると、天龍寺慈濟院にも写本が所蔵さ

れているとのことだが、未見である。なお、原稿執筆時点において、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースでは、小浜図書館所蔵『南遊集』を同一書としてあつかっている([http://dbrecn.riac.jp/KTG\\_W\\_114596/](http://dbrecn.riac.jp/KTG_W_114596/)、二〇二〇年八月二十一日閲覧)。しかし、実見したところ、その内容は天文八年度遣明船時の策彦周良の日記『初渡集』下と同一であり、本稿で取り上げている『謙齋南遊集』の写本ではなかった。

- (3) 岡本真「目録からみた妙智院旧蔵策彦周良入明関係史料」(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室編『中世政治社会論叢』東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室、二〇一三年)六八頁。なお、同論文執筆の時点では『天龍寺本寺並塔頭諸末寺所蔵稀書目録』の成立年次を不明としたが、その後、享保十三年十月に、所蔵する稀書の目録を提出するようにとの幕命が京都五山に伝えられ、これをうけた相国寺が、翌年七月付で目録を作成して寺社奉行所に納めた事実の存することに気づいた(相国寺所蔵『參暇寮日記』『書籍御改書付』『書籍目録』、ともに相国寺史料編纂委員会編『相国寺史料』四・相国寺史稿一五(思文閣出版、一九八八年)四〇二〜四一三頁所引)。この相国寺の『書籍目録』と比較すると、体裁や末尾に付された文言が共通しているため、『天龍寺本寺並塔頭諸末寺所蔵稀書目録』も、享保十三年末〜同十四年に作成されたと考えられる。
- (4) 以下、特に断りのない限り、本稿に記した算用数字は、後掲の翻刻の上部に付した通し番号を示す。
- (5) 注(1) 牧田書三八五頁。
- (6) 注(3) 相国寺史料編纂委員会編書一九九〜一六七頁。
- (7) 「天龍寺長老」と書かれた場合、一般的には法諱の下字が「仲」の天龍寺住持経験者ということになる。『天龍寺住持位次』(東京大学史料編纂所所蔵謄写本)などを一覧する限り、該当する人物は叔芳周仲だけである。しかし、彼の活動時期は、策彦周良の出生以前の十四世紀後半〜十五世紀前半なので、時代が合わない。
- (8) 中山玄中については、泉澄一「天竜第二〇九世・中山玄中和尚につい

て——対馬以酌庵輪番時代を中心にして——」（『ヒストリア』六三、一九七三年）、同「天竜寺第二百九世・中山玄中和尚について」（『史泉』五〇、一九七五年）に詳しい。

- (9) 牧田諦亮氏は、岩崎弥之助の命で書写されたものであろうとの静嘉堂文庫による推測に言及している（牧田諦亮『策彦入明記の研究』下、法藏館、一九五九年、のち同『牧田諦亮著作集』五、臨川書店、二〇一六年に再録、一四二・一四三頁）。

- (10) 内題が「謙斎南渡集」ないし「策彦禪師南渡集」であることや、妙智院六世の蘭室玄森の作製した、策彦の事績をまとめた「前住円覚策彦良禪師行実」（宮内庁書陵部所蔵『策彦入唐雜録』所収）にも「南渡集」とあることからすると、本書は本来「南渡集」と呼称すべきかもしれない。だが、底本所蔵者における登録名称が、牧田氏の翻刻をはじめ諸研究において広く用いられている状況に鑑み、本稿ではひとまず「謙斎南遊集」の書名を採ることとした。

- (11) 注（9）牧田書一五五頁。

- (12) 策彦は天文八年度船渡航時には豊坊との面談が叶わず、同十六年度船渡航時にその念願を果たした（『再渡集』嘉靖二十七年九月二十日条）。

策彦と豊坊の交流については、山崎岳「日本貢使策彦周良與寧波解元豊坊的文墨之交」（劉序楓主編『亞洲海域間的信息傳遞與相互認識』中央研究院人文社會科學研究中心、二〇一八年）参照。

- (13) 注（1）牧田書三八五頁。

- (14) 規宗を策彦の法弟とする説もあるが（東京帝国大学史料編纂掛編『古文書時代鑑解説』上、東京帝国大学、一九二五年）、彼の法孫に規宗周超がおり（玉村竹二『五山禪林宗派図』思文閣出版、一九八五年、二〇〇頁）、同人の可能性がある。

- (15) 朝倉尚『禪林の文学』（清文堂出版、一九八五年）四五三頁。

- (16) 注（9）牧田書一五五頁。

- (17) 『大日本仏教全書』一四四〜一四六（仏書刊行会、一九一四〜一六年）に収録されている。

- (18) 宮川一翠子については勝又基「宮川一翠子覚え書——和漢の位相

——」（『語文研究』八一、一九九六年）参照。

- (19) このうち二篇巻二については、典拠が「策彦入明記」である旨が記されているが、実際には本書が底本であることは疑いない。注（9）牧田書一四五・一四六頁参照。

- (20) たとえば2の詩は、『初渡集』嘉靖十九年八月二十五日条では「余嚮遊虎丘寺、々后有和靖讀書台、余偶作詩、未記録、故写于此」との文言につづけて記されている。これは、2が本来は彼の虎丘寺訪問を記す同二十三日条に載せられるべきだったことを示すとともに、『初渡集』が日々書かれていたことをあらわしてもいる。

- (21) ただし56の太白楼を詠んだ詩の位置は適切でなく、行程順からすれば92の後に挿入されるべきである。

- (22) 須田牧子「杭州へのがれ、虚構の詩作」（東京大学史料編纂所編『日本史の森をゆく——史料が語るとっておきの四二話——』中央公論新社、二〇一四年）六三・六四頁。

- (23) 「仏智広照浄印翊聖国師年譜」（『続群書類従』第九輯下・伝部、続群書類従完成会、一九八八年）六七〇頁。伊藤幸司「遣明船時代の日本禅林——芳澤元報告へのコメントにかえて——」（『ヒストリア』二三五、二〇一二年）一三八・一三九頁。

〔付記〕本稿は、二〇〇九〜一一年に東京で行なった輪説会の成果を含むものである。会の参加者は以下の通り（敬称略）。稲川やよい、白井和樹、榎本渉、岡本真、オラー・チャバ、須田牧子、関周一、手島崇裕、米谷均。またJSPS科研費17K03058・20K13172の研究成果の一部である。末筆ながら翻刻をご許可くださった妙智院ご住職島見周隆氏に篤く御礼申し上げます。

翻刻

凡例

- ・底本には天龍寺妙智院所蔵本を用いた。
- ・文字はおおむね常用字体に改め、読点・並列点を適宜加えた。
- ・校訂注は本文の脇に（一）、人名注等は（一）を付して示した。
- ・詩題・詩序に便宜通し番号を付した。ひとつの詩題・詩序が二首以上にかけられる場合は各詩にアルファベットを付した。
- ・底本と他本で異なる字句等は、本文左脇に番号を付し、対校注に示した。『初渡集』以下は、収録の有無や排列、詩題・詩序等における差異が著しいため、漢詩以外の部分の対校を省略した。対校に用いた諸本の略称は次の通り。

- 書A本 宮内庁書陵部所蔵『謙斎南渡集』
  - 京本 京都大学人文科学研究所所蔵『謙斎南渡集』
  - 書B本 宮内庁書陵部所蔵『策彦南渡集』
  - 国本 国会図書館所蔵『策彦和尚南渡集』
  - 静本 静嘉堂文庫所蔵『策彦南渡集』
  - 初 天龍寺妙智院所蔵『初渡集』
  - 詩 天龍寺妙智院所蔵『晩過西湖詩』
  - 雑 天龍寺妙智院所蔵『謙斎雜稿』
  - 藁 元禄六年版本『拾遺意行』所収「南遊藁」
- ・本翻刻の末尾に、右の「南遊藁」の翻刻を附録として掲載した。ただし訓点・送り仮名は省略した。詩題に便宜通し番号を丸数字で付し、ひとつの詩題が二首以上にかけられる場合には各詩にアルファベットを付した。なお『謙斎南遊集』に存する詩は、同書の対校注に校異を示したため省略した。また、詩題の対校も省略した。

〔表紙〕  
「謙斎南遊集」

- 和韻呈張大人執事下、  
交盟繾綣以詩酬、親則他州勝故州、遮莫西東語音異、良媒幸有管城侯、  
（林通）和靖讀書臺、
- 路自翠微深処過、荒臺無主粉牆空、書声斷後泉声続、却訝先人誦未終、  
（竺商寿文）天童、（密庵咸傑）於密庵塔有偈、次其芳韻、
- 副使（竺商）遊天童、（密庵咸傑）於密庵塔有偈、次其芳韻、  
一山門是両山門、震旦扶桑皆子孫、勝似鷲峰四華瑞、普天甘露雨翻盆、
- 薛蘭室先生有詩、即次其韻、  
博愛許吾蘭室下、公詩清雅可為宗、明年六月棹舟去、載得新詩到日東、
- 賜筵宴之翌日、伴送官李大人作川八見寓賀忱、聊贅其韻、以奉謝聖恩万乙云、  
摩雲樓閣幾重々、知是紫宸移紫蓬、卿棘公槐筵宴麗、樂花礼葉禁班隆、沛然德雨涼天下、浩蕩恩波注日東、正好清時揚側陋、山川雖異此文同、

（1） 荒、初「古」。

（2） 声、初「臺」、頭注ニ異筆デ「声カ」トアリ。

（3） 先人、初「逋仙」。

（4） 和韻呈張大人執事下ヨリココマデ、底本、第一丁ニ記スモ追補ナラシ。書A本・京本ナシ。書B本・国本・静本、和靖讀書臺ヨリ却訝先人誦未終マデヲ本書末尾ノ奥書ノ前ニ記シ、ソレ以外ハナシ。

謙齋南渡集 渡唐行年四十一再渡四十七歲  
〔三十九歲再渡四十七歲〕  
〔付箋〕

6 鹿嶋文殊堂、

遠踰煙水叫南來、利劍借持將斷災、我如婦去到斯地、再見文殊復善財、

7 洋中遣鬱懷、

回首西東不看山、豈忘南北有人關、蓬窓難結故鄉夢、声冷洪波浩渺間、

8 二号船孤竹老人寄一絶、聊次厥韻、

複水重山意轉迷、人如鳥失旧時栖、朝來日与夜來月、初辨海東初辨西、

9 洋中始見大唐之山、

出五嶋後、船中之衆卒每日上檣頭、着眼於香霧、窺見大唐之一峰、指示其美者、即与孔方十辯・太刀一腰、以為褒美也、旧例如此矣、

酷飲山亦欲迎吾、遙捧孱顏天一隅、占得大明天子詔、篙師急々運舟、

(5) 底本ヲ除ク諸本、付箋ナシ。

(6) 謙齋、書B本・国本・静本「策彦禪師」。

(7) 渡唐以下ココマデ、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本、割注ニ「初渡三十九歲再渡四十七歲」トアリ。

(8) 嶋、静本「島」。

(9) 斯、静本「此」。

(10) 失、初「忘」。

(11) 月、書A本・京本「日」。

(12) 嶋、静本「島」。

(13) 占、書A本・京本「古」。

10 補陀洛寺、在寧波府南海之中央、靈境而非人間之地、

a 梵音潮下度迷流、千手相分為楫舟、慈眼活開輝利海、何攸是匪大悲洲、

b 優曇吐藥色香濃、  
逐四時不凋塵外叢、衆鳥悉皆含仏性、声々二十五円通、

11 賡寧波府竹所大人見寄吾友珠宣公之韻、以同酬、

未見清容意先足、風流文物久聞諸、呼為天下奇男子、況称世南行秘書、愧我胸襟無一字、知君蚤歲惜三餘、冰霜志操可消夏、雲水生涯不愛廬、盟約若修同竹馬、帰期何必在蓴鱸、中華若木莫言遠、紅日朝々照碧虚、

12 趙一夔大人前日忝賜尊詩、再誦三讀、舒又卷々又舒、何惠加焉、

爾來官事紛紜、弗遑裁答、似慢乎、聊綴蜂腰強統貂尾云、  
聖代靡疎親、他鄉忘主賓、灯前十年面、門外九衢塵、拳酒因知己、參

(14) 底本ヲ除ク諸本、傍書ナシ。

(15) 楫、書A本「掛」。

(16) 洲、書A本ナシ。京本「淵」。

(17) ○ヲ伴ウ挿入、底本ヲ除ク諸本、地ノ文トシテ記ス。以下、特ニ対校注ヲ記サヌ場合ハ同ジ。

(18) ○逐四時不凋塵外叢、書A本・京本「逐四時不凋塵外叢」。書B本・国本・静本「不逐四時塵外叢」。

(19) 含、静本「合」。

(20) 容、国本「客」。

(21) 胸襟無一字、初・藁「旅程無一物」。

(22) 々、藁「朝」。

(23) 々、書B本・国本・静本「卷」。

(24) 靡、国本「廉」。

詩不祭神、探花何処是、有待洛陽春、

13 維時七月、到夜炎熱酷、客睡不安、月色如昼、時間砌下蛩声、与

吾邦蛩声無異、不克靡感于懷、聊作此詩、

万語千言幾日通、逢人却若不相逢、今宵喚起還鄉夢、我有旧声唯暗

蛩、

14 謝范南岡齋酒肴來訪、

感君携酒慰煩襟、交義未深恩渥深、預恐歸期惱離思、他鄉亦有故人

心、

15 遊月湖之次、詣会泉大人、謝昨日袖詩來、輒和前韻以二篇、

a 鑑湖孰与月湖清、此去他時要紀行、為慕賀公終老地、幾回屈指算遊

程、

b 景自月湖晴後清、只疑身在画中行、再遊眷々訪君處、欲統佳篇愧客

16 古岩大人有令子、頃喪其母、贈一偈以助其哀云、

五十餘年四大床、無陰陽地涉陰陽、金風体露生鉄面、粧鏡臺成正覺

場、

17 南滄老人嚮賜同韻詩二章、宛如錦上花束、而附韻尾者一絶、余日

夜待天詔之降、故末句及之、以投几右云、

孤館蕭條無客來、佳篇落手興悠哉、幾回北望帝京立、不識詔書裁未

裁、

18 南滄老人復見寄五言詩篇、再和而遣懷云、

鄉情猶未忘、夜々幾刀州、君有同風句、吾無明月投、芋羊難辨錯、蘭

鮑豈堪儔、他日如相許、披襟共倚樓、

19 張東津大人未面、先有書簡之賚、作詩以謝之、

未見清容先識心、書中下髯勝明箴、講交若入文章社、寸刻唯應直万

(36) 岩、書B本・国本・静本「巖」。

(37) 助、書A本「賜」。

(38) 五十餘、初「二十餘」。藁「二十四」。

(39) 金風体露生鉄面、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本・初

「吾翁宜偈頌香后」。藁「吾翁宜偈頌香後」。

(40) 章、書A本ナシ(一字アキ)。

(41) 余、書A本・京本・静本細字ニ作ラズ。

(42) 寄、書B本・国本・静本「奇」。

(43) 々、書B本・国本・静本「夜」。

(44) 芋羊難辨錯、初「芋羊難辨誤」。藁「棗龜何足恃」。

(45) 書中下髯勝明箴、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本・初

「昨來慰寂寄嘉音」。

(46) 寸刻、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本・初「二諾」。

金、

20 錢龍泉大人來問筆談移時、<sup>(48)</sup>予將出酒盃、大人再三辭之、故以吾邦

宇治茶代之、座已終、大人婦去、<sup>(49)</sup>黃南原繼踵而來、携一少年云、

此兒、昔蘇玉堂所親李節推遙々華胄也、<sup>(50)</sup>為令慰翁旅寓、引之而至

云々、少年自袖中出詩一篇付予、

茫茫万里發扶桑、秉志來觀上国光、<sup>(51)</sup>乳燕出巢成矣翼、<sup>(52)</sup>一宵願染衲衣

香、<sup>(53)</sup>

21 予的当和而遮少年之美目、<sup>(54)</sup>持戒難如何宿桑、他生若在約恩光、<sup>(55)</sup>節推孫葉月中桂、古也香兮今也

香、

22 愚訪戴子望秀才、俾豪忠通事前導、蓋為。昨之書。也、<sup>(56)</sup>秀才出而

倒履挽留、筆談移晷、以建溪葉字茶代酉水、<sup>(57)</sup>茶味甜而又香矣、又

飯道於此、詣前翰林全仲山大人、<sup>(58)</sup>喜而迎接、出杯更酌、爛醉

扶人婦、

杯環四海酒波瀾、酬猷筵中天地寬、<sup>(59)</sup>唐宋謫仙君以合、古今何隔一毫

端、

23 全仲山弟季山、以書招余、<sup>(60)</sup>々赴于彼、則闕。屢屢并於輜轄、約

婦以暮鴉。故不心於忽々發遊興者也、<sup>(61)</sup>砌下有數箇益壺、々中貯

榴樹、每樹開花者燁々、余問曰、吾邦亦有此花、<sup>(62)</sup>五・六月之交最

其盛也、只今上国閏七月初二、<sup>(63)</sup>花方盛鮮、奇哉、仲山把筆書答

曰、吾邦人多賞此花、々之久自五月及七・八月、又至十二月再著

花、<sup>(64)</sup>感賞罔措、請筆賦卒什一章、

24 驚人春色石榴濃、及夏及秋々又冬、<sup>(65)</sup>紅映酒杯青映茗、一盆花葉主翁

惊、

予駐錫於寧波之府六旬餘、<sup>(66)</sup>聞柯雨窓之名、不識雨窓之面、造次顛

沛、<sup>(67)</sup>仰慕惟深矣、新涼入郊之頃、適有蒼頭捧一緘來、披而視之、

見和余投范氏詩之佳作也、<sup>(68)</sup>蓋唐人句法・晋人楷法出一手者、且復

副以新画一幅・古文兩策、余獲此三絕十襲而秘、<sup>(69)</sup>何賜加焉、吁、

未晤對之先、<sup>(70)</sup>眷惠如此、何況一往一徠之后哉、古人以画・詩・書

(47) 唯慮直万、初「只須輕百」。

(48) 予、靜本細字二作ラズ。

(49) 遙々、書A本「途」。京本「途々」。書B本・国本・靜本「遥遥」。

(50) 々、書B本・国本・靜本「云」。

(51) 予、書A本・京本細字。

(52) 々、書B本・国本・靜本「茫」。

(53) 乳燕出巢成矣翼一宵願染衲衣、<sup>(54)</sup>底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国

本・靜本・初「果是車書同四海袈裟端染御炬」。

(54) 予、書A本細字。

(55) 水ノ後、書A本・京本「代」トアリ。

(56) 々々、書B本・国本・靜本「大人」。

端、

23 全仲山弟季山、以書招余、<sup>(60)</sup>々赴于彼、則闕。屢屢并於輜轄、約

婦以暮鴉。故不心於忽々發遊興者也、<sup>(61)</sup>砌下有數箇益壺、々中貯

榴樹、每樹開花者燁々、余問曰、吾邦亦有此花、<sup>(62)</sup>五・六月之交最

其盛也、只今上国閏七月初二、<sup>(63)</sup>花方盛鮮、奇哉、仲山把筆書答

曰、吾邦人多賞此花、々之久自五月及七・八月、又至十二月再著

花、<sup>(64)</sup>感賞罔措、請筆賦卒什一章、

24 驚人春色石榴濃、及夏及秋々又冬、<sup>(65)</sup>紅映酒杯青映茗、一盆花葉主翁

惊、

予駐錫於寧波之府六旬餘、<sup>(66)</sup>聞柯雨窓之名、不識雨窓之面、造次顛

沛、<sup>(67)</sup>仰慕惟深矣、新涼入郊之頃、適有蒼頭捧一緘來、披而視之、

見和余投范氏詩之佳作也、<sup>(68)</sup>蓋唐人句法・晋人楷法出一手者、且復

副以新画一幅・古文兩策、余獲此三絕十襲而秘、<sup>(69)</sup>何賜加焉、吁、

未晤對之先、<sup>(70)</sup>眷惠如此、何況一往一徠之后哉、古人以画・詩・書

(57) 弟、書A本・京本「第」。

(58) 々、書B本・国本・靜本「忽」。

(59) 箇、靜本虫損跡ヲ写ス。

(60) 々、書B本・国本・靜本「壺」。

(61) 岡、国本「岡」。

(62) 々、書A本「○」。書B本・国本・靜本「秋」。

(63) 予、書A本細字。

(64) 聞、国本「閱」。靜本字ノ残画及ビ虫損跡ヲ写シ、朱筆ニテ傍ニ

「聞」ト記ス。

(65) 画、国本「尽」。

(66) 余、書A本「全」。

為三絶、則文策其餘波。及也、非可默止、磨瓦礫代瓊瑤之報云、

先識才名未見君、願聞清話解塵紛、一朝贈我餘三絶、齋画詩書齋古

文、

25 趙一夔先生來遇、惠以桃果、々大合吾邦三桃実、風味亦別也、先

生遊累刻、乞筆硯親書閏七夕三字、雷詩於余、々綴曰、

送七宵重迎七宵、女牛愁自閏餘消、天如借一隻烏鵲、用作人間再渡

橋、

(67) 眷、京本・国本「春」。

(68) 瓊、書A本・京本ナシ。

(69) 先識、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本「久識」。初・藁「久稔」。

(70) 見、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・静本・初・藁「遇」。国本「過」。

(71) 願聞、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本・初・藁「何当」。

(72) 贈、初・藁「惠」。

(73) 餘、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本・初・藁「以」。

(74) 齋画詩書齋、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・静本・初「新画新詩又」。国本「新尺新詩又」。藁「新画新書又」。

(75) 遇、書A本「過」。

(76) 々、書B本・国本・静本「果」。

(77) 親、書A本ナシ。

(78) 三、書A本ナシ。

(79) 々、書B本・国本・静本「余」。

(80) 天如、初・藁「若天」。

(81) 用、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本・初・藁「汝」。

26 俾館夫王鑑、呈金紫光録大夫陸亶大人、

聖朝久息兵、無処不昇平、進拜待明詔、遠來抽赤誠、李円方外友、陸遠社中盟、君玉鞍我屨、推敲約送迎、

文、

27 新篁翁有悼孤竹老人之一偈矣、余与老人有青眼之旧者久矣、依厥

韻遣哀傷云、

欲霜秋葉未辞枝、何事忽々去先時、月落前溪無覓处、虚空。却一彎

眉、

28 連日秋雨不晴、客窓素月不来、聊築小詩之城、以遣鬱懷云、

客愁易倍夢難成、細聽檐間積雨声、緬憶吾郷水西寺、今宵月色暗耶

明、

(82) 鑑、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本「鑑」。

(83) 光録大、書B本・静本「光録太」。国本「光録太」(字ノ滲ミノ書キ直シカ)。

(84) 君玉鞍我屨推敲約送迎、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本・初・藁「君若許同志何曾談利名」。

(85) 青、国本「旨」。

(86) 々、書B本・国本・静本「忽」。

(87) 客、書A本・京本「容」。

(88) 以、書A本・京本ナシ。

(89) 云、書A本・京本ナシ。

(90) 客、初・藁「旅」。

(91) 易倍、初「難忘」(朱筆「倍」ノ上ニ「倍」ト墨書ス)。藁「難忘」。

(92) 聽、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本・初・藁「教」。



29

昨夜及三更、夢梅樹大者、枝々交參、標格可見、未著花萼、不知何兆、余卒綴野詩、遠獻北野聖君、

不待江南春色加、夜來入夢小橫斜、吾胸別有全梅在、百詠花中無此花、

30

夜來鄉。曲折、耿不安枕、時將徹曉、余適哦老杜秋天不肯明句之頃、樂音琅々然起、自外面頓有陽春冲融之氣、使人散羈憂、凡中州之為州、千歲之下、周孔礼義行世、雖樵豎牧童之口、唯。聖道則不談、及礼葉將秋、復有棠花回春、所感弗俾吾邦平生久要視此礼樂之美、感嘆無措、作詩遣懷云、

樵豎牧童談孔姬、中州風物未曾衰、棠花叢裏春猶在、不逐山川搖落時、

31

二号船々頭河上木工、為三艘祈禱、修懺摩一座、余・副使・從僧・兩居座・土官以下、為請衆矣、齋了施浴、新篁翁於室中作頌、余即衝口而和云、

奴視揚州陰子春、当年忍垢是何因、宣明妙觸円通水、一洗人々客（朱筆）祖園分得温湯水（離却）脚

（93） 緬憶吾鄉水西寺今宵月色暗耶、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書A本・京本「緬憶吾鄉水雨寺今宵月色暗耶」。書B本・国本・静本・初・藁「臥内無人四隣暗多情鷄犬報天」。

（94） 々、書B本・国本・静本「琅」。

（95） 羈、書A本・京本「覆」。

（96） 義、書A本「儀」。

（97） 雖、京本「雞」。

（98） 云、書A本ナシ。

（99） 穢、京本「緘」。

（100） 浴、書A本・京本「俗」。

（101） 揚、書A本・京本「楊」。

舍塵、（下）

32

四明有先生号梅崖、蓋以楷法鳴中華者也、其人和氣温然如春在花、実明道（程頤）・疊山流亞乎、一日訪余於旅館之頃、需綴卓作瀆美（謝枋得）稱、弗獲嶮拒、裁二章塞其請云、

a 梅花標格点無塵、最映江南野水浜、俗紫凡紅望崖卻、一枝別置四時春、

b 花有魁君只一人、雪為肌骨月精神、蘇仙佳実滿枝熟、德色相伝必有隣、

33 梅崖雲冠大人手親写墨竹一兩莖、添有声（画）、以贈焉、其画取英明清三字為軸子、即時和章而謝之、

是翁筆力万人英、鉄画銀鉤冠大明、猶有鄭虔三絶在、画図詩句備員（多君イ）清（一）。

34

中秋之夕、对月遣興、秋已清時月更清、中宵何処不関情、兩鄉千里無私照、東大倭西又大（朱筆）滿大倭西又大（一）清（一）。

（102） 宣明妙觸円通水一洗人々客舍塵、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本・初「祖園分得温湯水離却人人脚下塵」。

（103） 作、書A本・京本ナシ。

（104） 最、初・藁「掩」。

（105） 隣、書A本「憐」。

（106） 冠、書A本「魁」。

（107） 是翁、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本・初「多君」。

（108） 画図詩句備員、底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本「画図詩句一般」。初「添詩添画一般」。

（109） 宵、藁「霄」。

（110） 情、書A本「晴」。

（111） 千、藁「万」。

明、

35 鏡清寺、寺有詩文之僧、人所識也、一日作詩寄余、(馬)々即和之、求交友之親者也、

祇道水辺林下身、詩禪文熟本清真、才名千古以誰比、越徹杭標是此人、

36 於浙江駅、詣南寓外史豊存叔、々相見予、講礼後請婦、叔挽留前

導、以引于遊宴之堂、俾予坐七宝瑠璃床榻、居座(球叔全瑠)瑠瑠首座・從僧

生首座坐中賓之榻、視左右則青貝曲泉之榻・金漆花紋之榻十五・

六脚、並而置之、主人床榻之右辺、十五・六歳美童十二・三人、

廿歳許侍從十六・七人、着履踞于長連床、堂内環堵立古画屏風、

々々有脚、以金銅造之、画図咸李唐名筆也、少焉出盃盤酌天賜黃

封之酒、主賓互請隗始、予遂從存叔之命資始、酒味之芳醇、不在

我邦矣、嘉肴再三出之、以予盃進存叔、次瑠瑠首座、次生首座、前

(112) 大倭西又、底本「滿大倭西イ」トノ朱筆傍書ノ上ニ重ネテ「滿大倭

西」ト墨書ス。底本ヲ除ク諸本傍書ナシ。書B本・国本・静本・初・藁

「滿大倭西」。

(113) 々、書B本・国本・静本「余」。

(114) 之親者也、書A本「也」。京本「之」。

(115) 浙、書A本・京本「浙」。

(116) 詣、国本「諸」。

(117) 々、書B本・国本・静本「叔」。

(118) 居座、底本「居座」ト記シ、異筆頭注ニ「居古文居字」トアリ。底本ヲ

除ク諸本「居坐」。

(119) 座、静本「坐」。

(120) 貝、京本「具」。

(121) 々々、書B本・国本「屏風」。静本ナシ。

(122) 予、書A本・京本細字。

後五行而止矣、中庭有蓮池、花未開也、画船二艘泛々然、存叔

請予船中、瑠・生二首座也同矣、叔於船中復宴飲、出豫北之竹葉

酒、淡而如水、叔云、不可累觴、醉三・五日也、故以小盃酌之、

仍乞筆賦即事云、

池磨菱鏡絶纖塵、桂棹蘭舟常載賓、学海淵源吾始見、文瀾浩渺孰相

論、才賢親垂渭浜釣、仁惠頻遷合浦蠙、天下李膺翁繼踵、龍門登陟属

斯津、

37 豊存叔即和云、

上人衣鉢淨離塵、今日偶然迎上賓、吐句周詩声入律、揮毫晋帖法難

論、积而儒墨共該服、席上珍璋不納蠙、婦使得波濤遠穩、布帆無恙

海東津、

38 八月十七日之晚、駐轎于浙江駅、土人云、明日十八、当県候潮之

辰也、因幸之一宿于茲、翌日齋後、将日衆而赴、觀潮塘、坡老詩

八月十八潮壯觀天下無之句、今日熟于目者也、

雪作山耶雲作花、崔嵬白浪及天涯、勢風沙矣声雷霆、腸断錢塘十里

家、

(123) 我、書A本・京本「吾」。

(124) 予、京本細字。

(125) 々、書A本「之」。書B本・国本・静本「泛」。

(126) 予、書A本・京本細字。

(127) 始、書A本・京本「如」。

(128) 晋、書A本「护」。

(129) 海東、書A本・京本「東海」。

(130) 晚、書A本・京本「脱」。

(131) 浙、底本ヲ除ク諸本「浙」。

39 題吳子胥廟、

香火是晨灯火香、祭如在幾百年祧、忠臣豈於於君移怒、欲沒越山身後潮、

40 晚過西湖、

a 餘杭門外日將晡、多景朦朧一景無、參得雨奇晴好句、暗中摸索識西湖、

b 日茲暮矣興何佳、暗度西湖々水涯、眼似老年看不見、六橋風景霧中花、

41 再渡之時、以先年遺憾、白昼渡西湖、先上湧金門樓、

湖在西餘杭在東、一門兩面道相通、樓頭直得不勞步、万境佳奇一覽中、

42 遊西湖六橋、湖之中外有十景名勝矣、

a 六橋昨日夕陽斜、征袖忽々無興加、不憶元暉真水墨、今新見錦樣鶯花、

b 湖水真為天下眉、重來全解雪堂詩、吟遊一刻貴於玉、十景變千多若絲、

43 題西湖四賢堂、堂中畫樂天・李白・和靖・東坡四賢之像、

蘇子吟殘數株柳、林君栖老一枝梅、樂天李白無遺愛、笑指西湖当酒杯、

44 上孤山、

山態雖孤德不孤、回頭四面是西湖、秋宜月也カ冬宜雪、地主眼中皆画図、

45 林和靖廟、

a 無童無鶴又無碑、纔有寒梅似旧時、邂逅逢花苦相問、逋仙去後主人誰、

b 千歲猶香和靖詩、橫斜疎影幾抽枝、何須別画先生去、花自凍吟清瘦姿、

46 十里松、在北岡峰之下、東坡在杭州之時、多出遊于此間、

a 青松十里影婆娑、老鶴結果生卵多、出壑清風良有以、散為四海百東坡、

b 夾路蒼松見始奇、周折枝々中矩規、十里応容天下半、風声尽是玉堂詩、

(132) 霄、書B本・国本・静本「宵」。

(133) 於於、底本ヲ除ク諸本「於」。

(134) 參、藁「詣」。

(135) 茲、初・詩・藁「云」。

(136) 暗度、初「抹過」。

(137) 々、書B本・国本・静本「湖」。

(138) 憾、書A本「憾」。

(139) 征、書A本・京本「往」。

(140) 々、書B本・国本・静本「忽」。

(141) 画ノ後、書B本・国本・静本「白」字アリ。

(142) コノ空白及ビ傍書、底本ヲ除ク諸本ナシ。書A本「矣」。書B本・国本・静本「也」。

(143) 碑、藁「基」。

(144) 底本ヲ除ク諸本、傍書ナシ。

(145) 苦相、藁「打頭」。

(146) 千歲猶香和靖詩横斜疎影幾抽枝、藁「湖水其西和靖祠寒梅独臥雪生涯」。

(147) 画、国本「尽」。

(148) 千歲ヨリココマデ、書A本・京本ナシ。

(151) 天龍寺妙智院所藏『謙齋南遊集』(岡本・須田)

47 保叔寺、在北高峰之頂、開山善導和尚也、仏殿之脇塑木像、々掛金襴衣、

善導開山一境彰、新添湖景遺僧房、雲成衣鉢屣成履、山水捧來行道場、

48 同寺有八角塔婆、

孤塔不孤千仏宮、重々相疊別兼同、転回箇々円成相、八角磨盤勢走空、

49 到浄慈寺上宗鏡閣、閣上有永明壽禪師語象十卷、宗鏡象百卷矣、

清浄慈門總門之額也、高聳空、推敲賓客月兼風、今年始力今日識永明旨、宗鏡百函二字未考湖水中、

50 靈隱寺、総門横勝靈隱寺三字、葛洪仙人所筆也、

篆字高於門上顔、葛洪筆跡墨斑々、不求向西竺移步、拳首飛來靈鷲山、

51 同上飛來峰、峰頂有堂、安釈迦坐像、左辺有最高峰、流出瀑布可觀者焉、

(149) 在、書A本・京本「東」。

(150) 泉、書A本・書B本・国本・静本「録」。

(151) 泉、書B本・国本・静本「録」。

(152) 今年今日、底本ヲ除ク諸本、傍書ナシ。書B本・国本・静本「如今始」。

(153) 旨、国本「言」。

(154) 函、書A本・京本「卷乎」。

(155) 傍、書A本「榜」。

(156) 々、書B本・国本・静本「斑」。

(157) 西竺、底本ヲ除ク諸本、傍書ナシ。

(158) 来、静本「首」。

(159) 坐、書A本「座」。

(160) 観、書A本「視」。

天上独尊攀山来、百億分身法会開、風前瀑韻熾然説、大蔵五千盈耳哉、

52 中天竺寺、有一山門、兼上天竺・下天竺、故自此門入三天竺寺、

一山門実両山門、白傳詩章無異論、上竺三天鐘易色、僧来僧去弄黄昏、

53 仏足泉、在上天竺寺、

一瓶一杓汲三天、冷暖自知消睡眠、昔日双跌鶴林涙、遠流此地又為泉、

54 径山寺、

遠上径山途有無、草深一丈法堂衢、一枝仏法漸東海、早指扶桑回履鳧、

55 長安駅、

此地長安宮闕堞、何為今作野人枝、縉紳冠蓋皆陵墓、惟有山河存旧時、

56 太白楼、楼上有李白醉像、又其左脇有賀知章像、

a 謫仙醉像総神丹、九転煉成長不乾、愧我非詩人輕上、得支倭両地得欺瞞、

b 知章太白友非常、身後並成鷗鷺行、人影月前迎此客、夜筵両酌樂何央、

(161) 天、書A本「竺」。

(162) 又為、書A本・京本「為又」。

(163) 岐、書A本「岐」。

(164) 李白、書A本・京本「太白」。国本「季白」。

(165) 得、書A本・京本抹消符ナシ。書B本・国本・静本ナシ。

(166) 支、書A本・京本「文」。

57 太湖七十二橋、一々澄日画橋也、在蘇州松陵駅、

跨湖有物為誰容、著意看時不是龍、浸影橋々何所似、洞庭七十二諸峰、

58 楓橋、在蘇州姑蘇駅、

楓橋未断僅存蹤、人物難逢境易逢、張繼去來無宿客、旧時山答旧時鐘、

59 寒山寺、殿之上面安寒山・拾得二像、々形与画図無異矣、左右立二牌、南無寒山文殊師利菩薩・南無拾得普賢行願菩薩云々、

古仏堂中空色并、寒山拾得貌如生、客船張繼題詩後、夜半鐘声天下鳴、

60 寒山井、寺僧云、山中及早、則動無水、寒・拾得二井而為遺物云々、

寺主從來以水誇、夏涼冬暖淨無瑕、才将一滴洒胸臆、鈍地新開智慧花、

61 拾得井、

井華穠緑若琅玕、殊栖芳々於白檀、行願海深千尺水、人間熱惱洗無

(167) 画、国本「尽」。

(168) 州、国本「外」。

(169) 存、藁「看」。

(170) 面、書A本・京本「而」。

(171) 画、国本「尽」。

(172) 無、京本ナシ。

(173) 々、書B本・国本・静本「云」。

(174) 二、書A本ナシ。

(175) 々、書B本・国本・静本「云」。

(176) 慧、書A本・京本「恵」。

(177) 々、書B本・国本・静本「芳」。

端、

62 虎丘寺、在蘇州姑蘇駅、開山羅什法弟生公也、

古寺基荒苔蝕碑、炬香煙薄僅量時、壁間留得昔年事、前度劉郎一首詩、

63 千人坐石、在虎丘寺、

岩上盤焉与鏡同、一千古仏坐談空、浮雲若覆及膚寸、法霑雨人西又東、

64 點頭石、在虎丘寺、生公說法之時、每石點頭云々、

小大岩姿帶雨清、方円箇々自然成、講筵何事點頭上、滅不滅兼生不生、

65 劍池、在虎丘寺、

模匪龍泉匪太阿、活人手段日礪磨、金剛王若近斯水、退倒三千不奈何、

66 恵山寺、在蘇州、寺内有茶水(178) 揭天下第二泉勝、子昂書之、

泉重恵山々重泉、冷々岩溜不知年、客愁滴破松堂雨、僧夢燃殘茶竈

(178) 於、書A本・京本「放」。

(179) 姑、書A本・京本「始」。

(180) 岩、書B本・国本・静本「巖」。

(181) 千人ヨリココマデ、書A本・京本ナシ。

(182) 々、書B本・国本・静本「云」。

(183) 岩、書B本・国本・静本「巖」。

(184) 雨、書A本「兩」。

(185) 々、書B本・国本・静本「箇」。

(186) 上、書B本・国本・静本「去」。

(187) 掲、書B本・国本・静本「揚」。

(188) 々、藁「山」。

煙、五里街頭雖墮世、大慈閣上別開天、他生願入此佳境、長伴閑雲借榻眠、

67 東坡先生祠堂、勝曰延陵館、在毘陵、

a 一非一是不干情、(190)身後文章千載行、(191)除却歐陽誰出右、(192)幾生修得到先生、

b 胡為垂翅赴瓊海、只合終身在玉堂、名与乾坤齊不朽、文兼日月永爭光、

68 東坡書院、同在祠堂之傍、堂院有守官二員、

來見玉堂雲霧窓、筆枯硯破不乾江、案頭旧物今空在、一点山螢影是釘、(193)

69 張子房廟、(194)張良、(195)勝曰天樞廟、在京口、廟守語云、兵將禱此廟必有応、

a 真個留侯定漢儲、誰言羽翼属商於、卯金四百年天下、功在圮橋一

(189) 毘、国本「毘」。

(190) 底本ヲ除ク諸本、訓点ナシ。

(191) 身後、藁「死后」。

(192) 戴、書A本「歳」。

(193) 齊、京本「齋」。

(194) 案ノ下、書A本「上」字アリ。

(195) 一点山螢影是釘、書A本・京本ナシ。

(196) 樞、書A本・京本「杞」。

(197) 話、書A本「語」。

(198) 応、京本ナシ。

(199) 個、書A本「是」。(朱筆)京本ナシ(二字アキ)。

(200) 橋一卷書、書A本朱筆ニテ記シ、直下二「明治壬午、(二五年、一八八三年)於宮内六角堂讀之、以朱字補之、宮島栗香」ト割書ス、以下同本ノ朱筆ハ宮島ノ手ナラン。京本ナシ。

卷書、

b 辭劉辟穀髮斑々、榮達皆忙不若閑、(201)祇道曾從赤松去、(202)猶留遺像在人間、

70 金山寺、(203)在揚子江中、開山裴頭陀也、(204)方丈額曰大徹、(205)円悟禪師書焉、(206)

解道金山々裏寺、上方隔在翠微間、龍為行者点灯去、鷗与残僧結社閑、茶鼎烹泉銷午睡、蒲团坐劫杜禪関、過船日暮重多少、翻載鐘樹影還、(207)

71 妙高臺、(208)在金山寺、臺上安文殊像、臺下有善財岩、

臺築妙高天下間、百城煙水座前分、善財何者我何者、非別峰親見德雲、

72 中冷泉、(209)揭天下第一泉榜、在金山寺、

(201) 穀、書A本・京本「老」。

(202) 々、書B本・国本・静本「斑」。

(203) 皆忙、藁「雖榮」。

(204) 祇、京本・藁「祇」。

(205) 揚、書A本・京本「楊」。

(206) 丈、静本「文」。(朱筆)

(207) 焉、書A本・京本「之」。

(208) 々、書B本・国本・静本・藁「山」。

(209) 間、国本「聞」。

(210) 社、藁「杜」。

(211) 午睡、藁「世味」。

(212) 劫、藁「砌」。

(213) 樹、書B本・国本・静本・藁「声樹」トアリ、傍書ナシ。

(214) 鐘樹影還、書A本・京本ナシ。

(215) 殊ノ下、書B本・国本・静本「之」字アリ。

此泉未掬意先清、天上人間第一名、若以玉川茶試得、蓬萊万里片時行、<sup>(20)</sup>

73 狸々洞、在金山々腰、

臥屐衣生経幾年、岩扉深鎖洞中天、狸々化作僧々否、唯有茶泉無酒泉、<sup>(20)</sup>

74 六亭、在金山之絶頂、曰江山一覽、曰煙雨奇觀、曰觀瀾、曰留雲、曰吞海、曰廻澗、又山号金龜也、

山容龜又不同龜、亭築六難藏六儀、欄上展開有声画、雨來湘景瀾吳潮、<sup>(20)</sup>

75 再渡之時、復上金山寺、

金山古寺記吾曾、一葉扁舟兩度登、瓦鼎煎茶談到暮、眼青頭白旧時僧、<sup>(20)</sup>

76 焦山寺、在揚子江中、与金山相对、漢焦光隱於此山、因名之、寺内有焦光祠、揭隠士祠之勝、<sup>(20)</sup>

(216) 掬、書B本・国本「掬」。

(217) 試、書A本「試」。

(218) 萊、書B本・静本・国本・静本「来」。

(219) 々、書B本・国本・静本「猩」。

(220) 屐、京本「履」。

(221) 々、書B本・国本・静本「猩」。

(222) 曰觀瀾、書A本「曰澗」。京本「澗」。

(223) 曾、書A本「曹」。

(224) 旧時、初・雜「去年」。

(225) 焦、書A本「佳」。

(226) 揚、書A本・京本「楊」。

(227) 山、書A本・京本ナシ。

誰言小隱々山陰、可惜不知仁者心、昔日焦光有遺韻、古祠松栢帶風吟、<sup>(20)</sup>

77 渡揚子江、

揚子大江天下無、暗中独渡老臊胡、等閑用汝作舟楫、万里滄波一葉蘆、<sup>(20)</sup>

78 甘露寺、在北固山上門、

天下奇觀愜素聞、江山猶未喪斯文、門開甘露蘇群渴、塔聳層霄千尺分、梵唄唱殘深夜汐、木魚吼破半岩雲、登臨少憩逢僧話、自咲忘帰対夕曛、<sup>(20)</sup>

79 九層鉄塔、在甘露寺内、

天匠運雲斤鉄塔工、重々法界様皆同、九層高聳射星斗、易地將飛都率<sup>(20)</sup>

(228) 栢、書B本・国本・静本「柏」。

(229) 揚、書A本・京本「楊」。

(230) 揚、書A本・京本・藁「楊」。

(231) 暗中独渡、国本「晴中独渡」。藁「聞曾濯足」。

(232) 門、書B本・国本・静本ナシ。

(233) 門開、書A本「開門」。

(234) 露蘇群、静本「露群」。

(235) 千尺分、藁「謝世紛」。

(236) 唄、藁「貝」。

(237) 破、藁「裂」。

(238) 岩、書B本・国本・静本「巖」。

(239) 咲、書B本・国本・静本「笑」。

(240) 匠、書B本・国本・静本ナシ。

(241) 々、書B本・国本・静本「重」。

(242) 都、京本「却」。

宮、

80 鶴林寺、方丈有旧詩板、刻李涉鶴林寺之詩、

鶴林僧舍以詩鳴、李涉一聯遺墨明、七々(21)鵬花來偶見、化為烏有一先

生、

81 邵伯廟、(26) 在揚州邵伯、

邵公所憩有祠堂、古往今來慕德香、意足不求遺像肖、居民千歲拜

甘棠、

82 舟中值立春、(27) 赴北京之舟行也、

蓬窓斜掩昼冥々、忽值立春如夢醒、遮莫他鄉知己少、東君依旧眼終

青、

83 淮陰侯祠、(28) 在淮陰、

秦楚平來未賞功、雲夢游獵失良弓、當時若用蒯通計、漢祖乾坤掌

握中、

84 漂母祠、(29) 在同処、

漂母身亡心未灰、女中有此丈夫才、曾將脫粟半炊飯、分与無双国士

來、

85 王祥孝河、王祥淮陰人也、

河以王祥鳴古今、臥水保母不尋常、行人一度漱斯水、不孝亦能為孝

心、

86 除夜、(30) 於北京海道舟中值除夜、

半是尤人半怨天、明朝四十下灘船、殘灯一点千金價、未到曉鐘猶旧

年、

87 又用前韻、

榮辱昇沈雖付天、々涯愧我跡如船、有何顔色对春色、生不成名四十

年、

88 楚項羽廟、(31) 在鍾吾、門揭西楚霸王四大字、

執銳被堅亡暴秦、豈囟天下属寬仁、(32)既司休掃廟前草、又有春風生美

人、

89 進履橋、(33) 在下邳、其傍有授書坊、

蹶項顛贏天下分、運籌帷幄樹元勳、(34)黃公一授素書後、更使圮橋高似

雲、

90 歌風臺、

(243) 有、書A本「在」。

(244) 々、書A本「々鶴」。京本「々鶴」。書B本・国本・静本「七鵬」。

(245) 揚、書A本・京本「楊」。

(246) 肖、藁「背」。

(247) 棠、京本「堂」。

(248) 々、書B本・国本・静本「冥」。

(249) 游、書B本・国本・静本「遊」。

(250) 計、京本「許」。

(251) 淮陰侯祠ヨリコマデ、書A本・京本次ノ詩ノ後ニ掲グ。

(252) 同処、書B本・国本・静本「淮陰侯」。

(253) 々、書B本・国本・静本「天」。

(254) 鋭、書A本・京本「銳」。

(255) 既司、書A本「祠」司。京本「司」。書B本・国本・静本「賢

司」。初「阿威」。藁「監司」。

(256) 廟前、初「廟前」。

(257) 々、書B本・国本・静本「坊」。

(258) 元、藁「之」。

(259) 後、初「后」。



漢高威氣蓋王畿、歌大風來雲忽飛、白雪陽春皆第二、非寬仁和者庶  
希、

91 漢高祖遺像、木像也、在歌風臺上、

隆準龍顏々若天、望為雲就又星躔、斬三秦虎狼蛇了力、一劍霜寒四百  
年、

92 瑠璃井、在歌風臺前、井傍有石碑、鐫以漢高祖手勅惠太子之書、

出山四皓聳其眉、羽翼儲君飛九天、高祖旧盟真不変、黄河如帶井中

泉、

93 齊桓公廟、在臨清齊清水馬清、

九合諸侯古廟纒、正而不譎遺松哉、夷吾一語昨非耳、旧雨々人今雨

苔、

94 宋太祖廟、在臨清齊清甲馬宮清、

十六月虧昏宋家、小星翳又北辰斜、年々写出韓堂夜、廟裏猶吹白雪

花、

95 老子廟、在魚鱗泉乾寧殿、廟門揭三清殿三字、

低頭金色大龜氏、西積袈裟東道冠、易地易時多救衆、慈恩太重幾千

般、

96 桃花口、在魚鱗泉楊青殿、

九陌塵中還得閑、無言桃李掩仙壇、天餘上巳好風景、節去也停行客

鞍、

97 日近皇都堂、在潞河、堂内上面額日近皇都四大字、自此駕車入北京、

堂前大道震雷譁、来往相連長者車、槐葉成陰隔天際、長安益近日辺

遐、

98 会同館、在北京順天府之中館也、万邦正貢聚于茲、

四海九州來会同、土宜猷納各旌功、吾何求轍行天下、今日親逢率土

雄、

99 玉河館、在北京順天府、河水流而入禁中之風凰池、故有巡河官人、而不流汚穢之物矣、

河磨珠玉得佳名、流入禁池揚至清、旱不減兮霖不溢、君舟臣水保昇

平、

100 入燕京參内、即席應制、

万里使星朝奉天、五雲捧上玉樓前、猷君唯以無疆壽、我是日東蓬島

仙、

(260) 雪、書A本「雲」。京本「雲」。

(261) 斬、書A本「斬」。

(262) 〇、書A本「尺」。京本ナシ。書B本・国本・静本「了」。

(263) 劍、京本「創」。

(264) 眉、書A本「肩」。

(265) 齊、書A本・京本「齋」。

(266) 齊、書A本「濟」。京本「齋」。

(267) 纒、書A本「頰」。ト朱筆傍書アリ。

(268) 臨齊泉、書A本「同」。京本「臨齋泉」。

(269) 營、書A本・京本ナシ。

(270) 々、書B本・国本・静本「年」。

(271) 老、書B本・国本・静本「孝」。

(272) 在魚鱗泉以下コココマデ、書A本ナシ。

(273) 于茲、書A本「千共」。京本「千谷」。

(274) 至、書A本・京本「主」。

(275) 日東蓬島仙、書A本・京本「日東蓬島仙」。書B本・国本「日。蓬島仙東」。

101 皇帝賜御詩、

東夷有礼信真縉、遠越潮溟明国彝、入貢從今応待汝、帰来勿忘朕敦儀、

102 応制和御詩、即席於御前涉筆、

入貢古今無磷縉、我邦久仰大明彝、三千礼楽珠簾捲、紫鳳翩々舞羽儀、

103 奉勅見花萼楼牡丹、

天下群花効此妍、色香不凡実神仙、李唐三百年嘉運、朶々開来置御前、

104 再渡唐参内猷野詩、

熟路洋中船翼輕、天書早召驗吾誠、禁池再浴恩波水、弊垢袈裟影尚清、

105 賜御和、

氏姓声名俱不輕、曰謙曰策尽其誠、前來錫杖今杯渡、戒律再三如ヨリモ水清、

106 四月二十三日、於上林苑賜宴、

五官人同題詩、七伶人同奏樂、皆是為予者也、

a 今日天恩与海深、鳳凰池上洗凡心、回頭群卉花猶在、始見青春帰禁林、  
日本使臣僧周良

(276) 詩ノ後、書B本・国本・静本細字ニテ「世宗肅皇帝」ト記ス。

(277) 磷、静本「磷」。

(278) 捲、書A本・京本「捲」。

(279) 清、書A本・京本ナシ。マタコノ詩、底本ヲ除ク諸本訓点ナシ。

(280) 今日、京本ナシ(二字アキ)。

(281) 臣、国本「巨」。

b 仁義相并日本僧、乘槎来慕孔丘曾、上林苑内榮華宴、美誉芳名高九層、  
翰林朱氏祐

c 見使華知其国光、接人氣宇太煌々、天朝恩賜綸舟楫、錦帆向榮帰故郷、  
相国李氏恒

d 碧眼胡僧到帝城、禅心道体二如瓊、險難遙歷正其使、帰便郷榆昼錦榮、  
前翰林程氏詢

e 正人胸宇有椒蘭、言語吹香日不殫、郷国胥哉何陋有、禅衣片々絶塵端、  
大監韓氏紆

f 积而儒又道而墨、三教相該斯上人、天子宣言頒御宴、九夷九国絶比倫、  
金紫光禄楊氏鶯

107 上林苑会拙作、翌日達 明聡、龍顔改観而賜御和、  
奇哉才業与淵深、佳作一章波瀾心、賢衲所栖春色永、禅林花発又詩

108 林、  
曲江、

(282) 太、書B本・国本・静本「大」。

(283) 李、国本「季」。

(284) 体、書A本・京本「射」。

(285) 遙、書A本・京本「途」。

(286) 昼、京本「画」。

(287) 詢、国本「論」。

(288) 殫、書A本・京本「彈」。

(289) 該、国本「談」。

(290) 人ノ後、底本ヲ除ク諸本改行ナシ。京本・書B本・国本空格アリ。

(291) 苑、書A本・京本「花」。

(292) 達ノ後、底本ヲ除ク諸本空格ナシ。

景似吾朝吉野川、落花漾水錦機鮮、無声詩与有声画、墨客騷人費万箋、

109 雁塔、在曲江院、

雁变浮囟脱卵生、風鈴高響自然鳴、囟知仏塔記登第、進士庶幾儒釈并、

110 再渡唐之時、帰寧波府、謝南寓外史(馬)豊解元製予謙斎記文、  
(豊坊)

豊解元字存叔、杭州浙江駅人也、遠勞使令投記文於当府者也、

南董筆端令属翁、重於九鼎画麟功、斯文恩恵加何賜、字々成珠輝我東、

111 初渡之時於洋中賦一絶、

回首西南是白雲、摩睫東北近郷粉、棹夫莫倦帰舟重、載大唐来献我君、

除空楮廿二張(28)

【附録】

南遊藁

天龍寺策彦

① 次韻寄竹所、(11ト同詩ニツキ省略)

② 和答趙双谷、(12ト同詩ニツキ省略)

③ 館中聞蛩有感、(13ト同詩ニツキ省略)

④ 謝范南岡来訪、(14ト同詩ニツキ省略)

⑤ 依湖心和尚祇夜之韻悼曹娘掩粧、(16ト同詩ニツキ省略)

⑥ 和答趙一元、(18ト同詩ニツキ省略)

⑦ 寄全仲山、

莫道江南隔海東、相親千里亦同風、從今若許忘形友、語縦不通心可通、

⑧ 柯雨窓恵古文真宝、副以詩画、(24ト同詩ニツキ省略)

⑨ 次韻贈陸会泉、(26ト同詩ニツキ省略)

⑩ 閏七夕、(25ト同詩ニツキ省略)

⑪ 贅湖心和尚之韻、悼孤竹文友、(27ト同詩ニツキ省略)

⑫ 夜雨口号、(28ト同詩ニツキ省略)

⑬ 夢見梅花、(29ト同詩ニツキ省略)

⑭ 中秋賞月、

a 遠離日本入真丹、為月今宵偶拍欄、回首人間尽胡越、姮娥独作旧時看、(29)

看、

b (34ト同詩ニツキ省略)

⑮ 聞楽音、時維九月、(30ト同詩ニツキ省略)

(293) 落花、書A本・京本「花落」。

(294) 浙、書B本・国本・静本「浙」。

(295) 豊解元字存叙以下ココマデ、書A本・京本ナシ。

(296) 令、静本「今」。

(297) 々、書B本・国本・静本「字」。

(298) 初渡之時ヨリココマデ、底本ヲ除ク諸本ナシ。書B本「天龍仲長老寄贈(前後)」トノ付箋アリ。国本・静本「天龍仲長老寄贈(前後)」トノ奥書アリ。

贈(前後)」トノ付箋アリ。国本・静本「天龍仲長老寄贈(前後)」トノ奥書アリ。

(299) 本、初「本」。

- ⑬ 摘梅崖〔崖〕二字贈方梅崖〔崖〕、(32 a 卜同詩ニツキ省略)
- ⑭ 代人和答張秀才、(1 卜同詩ニツキ省略)
- ⑮ 重陽前一日賞菊花、
- ⑯ 佳節未佳先見功、人心雖別菊花同、枝頭消息小元祐、秋屬九分司馬公、
- ⑰ 寧波知府曹大人〔曹誥〕以喪事謝府事、聊贈此詩、助哀叙別、
- ⑱ 哀情無幾別情增、十事人間九不恒、遐迩兩鄉同慕德、江南黎庶海東僧、
- ⑲ 小春二十五日奉荅神、
- ⑳ 北野神君旧姓荅、緬懷和夢扣禪関、飛梅不借舟車力、抹過大洋登徑山、
- ㉑ 晚過西湖、二首、(40 b、40 a 卜同詩ニツキ省略)
- ㉒ 林君復廟、二首、(45 a、45 b 卜同詩ニツキ省略)
- ㉓ 十一月七日、初雪自夜徹明、〔船中作〕
- 雪耶非雪夜寒稠、果是疎声到枕頭、曉看篷窓分外白、半疑宿鷺半疑鷗、
- ㉔ 七十二橋、〔在太湖〕、(57 卜同詩ニツキ省略)
- ㉕ 楓橋、(58 卜同詩ニツキ省略)
- ㉖ 惠山寺、(66 卜同詩ニツキ省略)
- ㉗ 東坡先生祠、二首、(67 a、67 b 卜同詩ニツキ省略)
- ㉘ 張留侯廟、二首、(69 a、69 b 卜同詩ニツキ省略)
- ㉙ 甘露寺、(78 卜同詩ニツキ省略)
- ⑳ 金山寺、(70 卜同詩ニツキ省略)
- ㉑ 猩々洞、〔在金山之巖〕、(73 卜同詩ニツキ省略)
- ㉒ 楊子江、(77 卜同詩ニツキ省略)
- ㉓ 邵伯廟、(81 卜同詩ニツキ省略)
- ㉔ 舟中值立春、(82 卜同詩ニツキ省略)
- ㉕ 淮陰侯祠、(83 卜同詩ニツキ省略)
- ㉖ 漂母祠、(84 卜同詩ニツキ省略)
- ㉗ 除夜、〔船中作〕、(86 卜同詩ニツキ省略)
- ㉘ 又用前韻、(87 卜同詩ニツキ省略)
- ㉙ 楚項廟、(88 卜同詩ニツキ省略)
- ㉚ 下邳授書坊、(89 卜同詩ニツキ省略)
- ㉛ 彭城阻雨、
- ㉜ 独坐灯前憶阿兄、天涯阻雨宿彭城、追羨蘇家兩鴻雁、連夜对床聽此声、
- ㉝ 漢高祠、
- ㉞ 生氣凜然隆準公、至今廟貌振威風、漢家數百年炎運、尽出布衣寒漲中、
- ㉟ 歌風臺、
- ㊱ 苛法已蠲民氣和、昇平樂入大風歌、々臺遺響猶盈耳、豊沛雪消春漲多、
- ㊲ 瑠璃井、
- ㊳ 湯沐邑荒無主人、苔封古井幾回春、豈知一滴瑠璃碧、〔曾〕洗五年兵馬
- ⑳ 緬懷、初「曾聞」。
- ㉑ 扣ノ後、初「老」トアリ。
- ⑳ 豈知、初「憶持」。
- ㉑ 曾、初「快」。

塵、

④5 太白樓二絕、

a 流水繞城々繞流、李公此地昔曾遊、有何面目對遺像、不酒不詩空倚樓、

b 夜即京洛雨茫茫、醉裡乾坤到處鄉、縱倒銀河釀為酒、終(304)當不滿翰林腸、

④6 二月初六、見紅梅纔開、

老梅影瘦水之灣、花似隱君將出間、晚達雖同標格異、馮唐白首汝紅顏、

④7 送魏提學歸休于粉鄉、

聖代祇今多寵華、休官何事獨歸家、晚春一別兩行淚、半恨啼鵲半落花、

④8 四月初四賞芍藥、

四月芳菲欲盡頭、花中宰相拔其尤、春風權柄今猶在、二十四番輸一籌、

④9 送策彥老人大明行、

妙心寺大休(天休宗休)

北老禪機截衆流、南遊何日太刀頭、海門風定鯨波穩、一葉舟中四百州、

⑤0 送策彥西堂赴大明行、

同

千里鶯啼遠送人、白頭何日又逢春、歸舟早載西湖月、呈我梅花面目

(304) 終當、初「終當生」。

(305) 粉、初「粉」。

(306) 兩、初「雨」。

(307) 北、見桃錄(大正新脩大藏經所収)「此」。

真、